彩色歌相撰

二

特別
へ13
1540
2

門 へ 13
部 1540
表 2

忠見
兼盛

彩女歌相撲

第一

東へ信濃山を西へ鶴が淵
○あづまへ信濃山をもらづりのを
ものの勝ぢ東は方なほあのそもろ山

松に釘を内輪のあらひ
ぐんさへの妹とあらはれ出る兄乃
ぢのことだうひ根ぢ海
乃姫ささくさすりぐ池

第二

硯をまうけて京のゆきうみ
人丸の哥とゝのこんごちゝめとゞ
つけゞ哥出てわろ門にはわたゞえ
まつもちろもちゝげる姫のうけ哥

第三

彈丸命いお積のるのうとうて哥
硯を風ゝとゝとゝひおかする
をゝふふおあゝて宮ゝうゝゝが
ぬちんのさうる姫れるひまけれ

一 松み行をうちうのあゝそひ

ゝて所ゝて哥義めう。姫所長欲も琴ゝたゝべて。平れ兼業の
御義姫さるぎの姫と実しゝ。はゝ文和所ゝおをゝ也ゝ文和高
ゝて。和ひのゝとおうけまくゝも。ゝて手のわゝんとゝゝゝ哥さ
やゝし人目の実ゝのひゝゝゝひまゝうも。京のゝるゝ和ゝて
ゝゝぞゝゝ家意ゝゝ京のさゝゝ哥ゝ
あゝゝのゝゝれゝゝまゝうゝゝゝゝゝゝゝ。
手のわゝんれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一首ゝうけてゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おなじみそすぢともなりて新てよりやとゝ侍るべし。
ちゝとをぢ〳〵おとゝへ。ぢゝたちてのなごりをゝしみ
給の御れへ新しをうけて。ひゝなを七日の御ぐちゝ海新蓬の
宿もねぢ〳〵てたもとかもやはもとゝてのおとゝへ。ぢゝをひめて
ぢとゝるぢゝたるよおなのはゝとあるなれば新さゝめおもあるてい
ひゝるとねゝづと。四にいとゞ嬉〳〵とそたゝるよひゝ。ちゝひゝ
ちゝあ〳〵ふたゝ〳〵ふもゝちひまゝもせゞでれ年の金元とゝ
うけてはゝ京ひゝるゝゝとびゝ〳〵とゝちひ新ゝうの蓬ともなゝうて
ともゝく天ゝあゝゝつゝとゝゝし新ゝ新ゝ新ゝ新ゝ新ゝ新ゝ新ゝ
切るなげきとゝゝのんにおゝゝ〳〵ゝ一首の歌とゝづけ新ゝ。
のゝち新ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。ゝふゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くるくるひさぐり
すゝさらくゝ
二ぢさう
さるぎの松
ゆるりあふ
うゝと二人
松のこさまを
んぶのさゝ
あはてゝさめる
さるぎの松
ゆるりあふ
すゝさらくゝ
ふるふ
さるぎの松
ゆるりあふ
ゆるりと松のぐり
あ方へ人をくだり
やうもとをかさ
一会の大
ひとう
えみゝ
いとと
そうろを
すぐり
ふとこうろ
ふちろ
いとと
えとろ
えとろれ
くるむ

深かの家にあてゝ文をかき平の為盛なる物語
を初て行をうけとゝ人ぐ つゝにも為盛の出家を
よくゝ思つゝおもふに只夢のようゝふるまゝ
うゝせゝかさねとゝをなゝねゝうゝ行り夜へ身も用ず
わつてまうゝ出ぞの方へ又ねとゝゝて此為盛をめゞけ行をうゝん
とゝねせゝぞ。あり行れみ向れせよとゝつゝ出家なゝれどもゝさんと
ねぜゝいびゝの程うゝうゝぶんる出家れを見ていさゝてもよい
為盛なる世の中に又わもかゝの為いあるまいとゝよりゝ行ても
さゝてもゝすゝれどゝあり附出家おにゆゝ為なゝゝわゝ。為盛
よんゝとてまうゝ。出ゝけをゝうゝ。なゞゝゝとゝれゝ。なゝゝけ
うゝ為ゝてゝそれゝうゝ。為ゝ出ゝけをゝひねゝゝ。世のゆゝはゝうゝ
ゝゝとゝゝひゝゝれ物とゝ又為盛ゝゝゝ。ゝゝゝ

それいはゝあの為ゝゝと出をゆゝゝに為ゝゝけう為盛の
出家ゝゝてゝゝ姫とゝんゝゝ為ゝゝと為盛を名ゝ
をよゝゝてゝんゝとの為ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

陰ぜんのうちに法れといそがせてかうかうぎょうをうちをれば
紙魚などにくくもつくんでさるべのの影ぬけがをどのつてよの和ら。
さあく人のとねるよりそうてはうりのるれとつくと。見さこね
こひさうの事いかりまやねそのの影ぶどらとそれへとそれにくと。
こくにまぶこさくせうのこ和まして。陰九郎ふてこうまぬこさ
色の現ぶこうこくおとけよ。あげぶこふくこもこのこうを。
陰の郎れあげてけこそれ式こんとこうと。妹のこの田こぶよ
こいせこ大のこげゆてちこアとこんこうすゃこそれへこうこ食
右見和へ禁中よりおあづこうけ寶和のお現をこけても
横ぶてい禁中へこんこんてまこれねこて。色こうとこうこ
のこれ寶にこうやまひかう色のこ現ふこれこんにはこここて
さこへこりこてここうここおこ寶とこれいい陰九郎も色芸にこ。

さあそれいくこといとと。妹へ和よさとくあるこの見はれ色いこ
よこさるにこんこせあぜれつこさとん。ちへさあ何こそぶよのるここ。
ようこうをゆして居まするこるこや色ぶてこぶこのこ何こそぶよ
こうこの妹こちぶ色とかるこ右見右とあこうと思てやこ三まぶあこ。生一
こ宝ぶのこ妹れゆへ陰九郎ぶくびぶけ。するやこう高宝右ても
にて。ぶけ右房よこれここうくこうけよそれ色へ和よ行おりでも
はこ色のこ右こけ色へなこへねとにこうこぶけこんこのこと
こへこんこさこんぜびこ。和り和へおこ見こくこ伊の中後わこてこうこ
おりこうこ和をくこされここここ。ここの現へ行射もれへへ家こ
なここんねこせこのこくおあづこうこ和こここいこ和を陰九郎へ足はけ
られこいこうこぶここせこ色て後日のあこと。力をゆこさこ。和こぶ
をこぶこと色せぶこうこやこここんここここうここやこうこと和を

りぐしにつゝみもあり れいこうぐんを野人などがいうにてもその方はたゝ四
にゝつゝ和のこと葉と侍あくまでいひつきゆとゝてきまぐいやらしき
かぐらうのことぞそのあと和むてゝろしてたれもの後ぬるのやとな
おのへども貴せびゝるいひ侍んやはとゝやとゝ一条あゝ也君
へ[illegible]ひこのやとゝ[illegible]ぐれどゝ[illegible]
ゝろやゝ侍ゝ[illegible]その頃と[illegible]
ゝ[illegible]れいゝとなゝゝもたゝ見れとゝ[illegible]
今ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
せゝれてゝゝゝいゝゝゝ

さて、ゆくさきもなくうせんそうの為めとて、こちよりはれて
西つの京のそをたまうりやちんとあるそのこの家中姫ぎぬ
ちあされしいさごめて姫が京あるの一家みとでさく あるさ
ちんとさーあるんてこの用かくろ名ぶんさるようでさ名ん
くくん書くが涙をくんで名人なりたかくる苦行みあるべさ
うしめの行ちうちあねねるそうとあるとき修中する。表よりつ
ちくくと書ばくくびちのあん四位るくんとくべ書けぐ
小書て解説縁の帝とちくくかるよ四ちうるくて。ちて
書尾いどうくくやくくと問めちくくて陸の帝かこの現ぬすこ
ちくてまくくりぬ月ヤうけれさくくに年の教ぬぶくくそれい。
いよく学子ねへ行くれ。れ月れ侯ねくびひとぶいりあ長。
さるびの姫いのるくびあよんくされなとぶの法ぐれ現のふくさ

さげとりてくくをつを。れり結ののろよりさくかでび絵来ぐれも
のくくみりとぶいるのくくと現とくけれぶくくるくへなさめ色。
みこあてあなるめをとるもくや出るるつの時科を四の名位も
ちくくるびぶの陸もくぐされどくれとるぶ色書ち家のりとて。
れをはくくいちくくあぶるひとあはまちうけなきれくる。
美黒くくとさくやさぶ書くいるくよくを絵吉で現ぶるれ
いる名言とよ山。初もくやくるれ四服へいぶ四名とはを
ぶくくてどくぶぶくくれのくりゆく姫へるれと目をさ海しぶくを
ぶくやくれるやさくぶるれくちゆくるまひぶのりくく意通姫式義の
くくあくくとありくくとさぶりしぶ絵のまいむれいるひはくくの上
いくとんくくいれ極へるぶ義ゆ書くくせゆるりぶせくくもくとくるくき
西絵るくぶくれくくふぶくくくれりるりぶ位るるぶと出ていくくるりせた

神のけげん美のことぞあり人もやんごとなくと物語の是と言
ごとのことと見てかの歌どころとおぼしたりけるを
のがしのひしがぞあり人とりなんとふくろざるとぬしう
いかも見れねふくさばくこれのくるとさるげん姫それへ行のと
はくこをとりせがおりひがけるき紫式の姫けうこれ人の事を
あり見ぞくあるとぶ特重の宮ぬこ著れへあづけの姫とんりて
まがいるみあるこれあるざればよく不義それやんぞ事をさづけ
あるとと見しぞていいをぐやまのるなるくれまへあり書れ書の
尾のたぐうあのあくしまをひとうもねんとやや見れのかなを
ひとうねうふうねふくやとおぐりたんとぞ人丸神のこれたそて
あるくのふぞおはたまのちるいいるすりあるこういぐそを
ふるいち見れ見れあさくあなんばけえいぐ事みなんぞあり

はたばけとのあくぐ衣の脇あとはとのくるぞ仏なくそれなが
ちん花あの右衣のあくさそれの仏ようへ和歌を行をに春ぞのひ
のふとうけのうはしくれば歌やしてうどよいけるさいへ
ぬ神いるくしぐ生ぞ人をおもはさわけあとぞくむくとの
うれくさも門はまるさいるあのあの私はくてあるんとぞくうんを
あくせやひのあくあ弟ども和歌ぞけうくこくこれ行うり
あまりをたのくゆひはぐ弟とぞ丸神のれたるくどぞ歌
たぐりてぞんなくふくりが私よのがりてぞゆいあるんれとなすれ
見ぬあるくあども意花よかるこうこう私ぐ私よかるこうん人や
とぐめんとあのをさはるぞひ和なる表愛へいぐぐぞ。居場ハ
そこそうとるくたるねどもぞたるまでいさあり弟門はして
あのこゆくぞたるぞるねどこ意人みあくんなのいそぐれて。栗田の

ゑや日ぢ笠のなりぞへ。ゆうりく仕も長和紙たく二人の方腹れ小てゝちんもけさせゝ。ぼんぼのびゝだてもぞゝ。それぞと見るより姫へ名つく紙をさゝり初ひいろまべさゝりがゝとりゝはぐうなぐゝ方見拓と見うけまして。わ移ぐひがござゝ方とつゝ。ぬ方ん入ゝ三中とゝへ五中とゝいひ五中の移ぐひぐそんゆんぐとありなれべいゝ。ぬそぐひゝ方筆でんてざゝりませぬがめれにゝとゝの〳〵まゝるハまゝとゝ〳〵が主人でゞりまとゝ。ちとわまゝ人に寅てゆ〳〵ひゝとへ拍がゝあるとゝゝされまとゝと宮て仕のゝちて紙年あゝさゝへ拍なべ明るゝべゝりて年れとゝいゝを方見ゝいゝくゝ方ぐとゝ見ゝちてのゝり拍仕なゝぞとゝ中ゝとてゝりゝく。姫へ新を紙りゝ〳〵仲の姫と宮ゝかれゞ月ゝげゝけゝとゝ〳〵見てゝ方ゝんゝおゞちゝく方見ゝ形ゝぞゝいゝゞ方拍のゝあゝがゝゝう。ゝのゝてゝその方ゝゝゝめゝ入ゝゝそ

ゝ紙の仕ゝゞなゝゝべゝゝゝ

るの与兵衛で女房のくぬぎ屋。ちゑをつけてこれをみがゝあ。
ゝまね家とぞうにてさめ〳〵ゝとなれのふさめりも能
くぞうでゝあるゝかゝるまゝいつて祝とうて力借〳〵それ
ゝてゝあ力丸祝をうこ〳〵ぐうりませうゝ力まゝ〳〵とつる
ちゝとうりゝ紀中と申てゝごゝんをゝかゝをなゝいゝと。義に
ゝゝひもゝ〳〵ぬ智恵ばゝ〳〵ゝ力丸ゝまゝ〳〵げゝ力まゝびもゝゝん。
ゝゝ義ゝ親ゝうゝりゝ力と和ゝのせゝりゝよゝゝゝ方ゝ妻と
ゝゝごゝさゝれ宮の妻とゝさゝゝゝ

時はおのゝ〜なさしねどなるゝねひ枕。勅使とあつたりさま事
なしぶそのあや絡とゆゝをかしきまれなさしぐつかと言
あ妻になさしてわさしよ。みあそせてあまけなさしあく
ぶを行んでかてなさしとの事なしぶさしもしん
ふまをう。是行よゝ事をあなさけもなくかをてなさしく
あ公なゝぶをゆゝをかぐさしろあすとゝをあ。
てみけるすしもと行さしかとぶちはゝぐけるさ仕合
ゝべゝゆゝしもゝんべゝとなまて枕とりうゝさんと
をしぶゝをゝけあてめしも家まゝよりの紫
なさ内ゝをゝゝゝゝ海。てそれゝゝとひのふすぎ
ゝ行ぶひしも是ゝいなりまやねとたひしてゝゝ見てど
ゝとゝのさゆりゝ。さあゝひゝゆゝひまやと姫とか

やう岩見も枕をうけ入さんをしなゝべと姫のよとをれおゝ
をゝゝ風けゝさゝをゝをゝてその枕をふりとふさあげ柳の枝よ
ゝもしは鞠を蹴あげゝゝぶくなりぶりさ石の風にあぐゝ
ゝゝ風ぐすぐさあゝそれて。是ゝやゆゝはゝ見枕ゆゝ。その枕は見
深山の弟ぐゝとゝ。それを見ゝとてゝをゝゝゝをゝさ。
去やゝゝまゝのさゝふまでもぐ意枕のゝゝさるぶの姫とゝひ
ぶにくをゝる一宮ひゝゝみぐ姫のゝげ月にゝゝぶを
事ハゝりひもようゝぶ。それ四ゝ枕をさゝゝぐゝけれまゝ。ひ
姫みをゝぐひゝをゝゝ。ゝ風姫ゝゝゝをゝ入ゝとなさしまをい。ゝをゝゝゝか
事ぐゝ水ゝゝて。空みれ是ゝのゝ。みゝど猫ゝゝゝゝと猿
せのゝと姫ゝゝゝれぐも。親ま猫ゝゝゝゝ。是ゝとゝゝゝぐ

ものとのことをよろこぶあまりなるねとて。親王れをうぐひとりぶ加茂
大臣利長ぶ婚りに妻あづけおろくとの家まと妻女あやぎぬのハ。
物語のたよりうぐひれて。今ゆるるの四級みこ〻れるとおせ
やろくへちやぐ右兵衛佐と四位侍のろくへ一家ゆく〻〻さるの姫。
祝をりつてのちてのまんがいひくの四ぐさせねそれゆへおるゆ〻たへハ
ゆんね風をふくの風ふるさるけ。右兵衛のろくと四位侍ぬへおろり
なるろくまでいさるの姫い家ゆ〻ろくへふるさおるべ〻。さあく
ろろ名ぬいをあでゆ祝よ外て四級ゆきれはせるとゆ〻妻ぐろう
ゆ〻ろよるるるくろくろろるれゆ。祝ハ風みろ〻〻。ゆまゆよ
右兵ハあれゆとありりけゆくを姫ハやろくゆぐれおろせ〻四
の家ゆのろれハなるけろ〻ゆくとれつるさゆ〻ゆ風ろりておろハゆく
にゆろくへひるもおゆくとろ風ゆくゆとはゆろとせゆ〻の声ゆよ。

右兵ぶかげも兵人ざれゆろ〻ゆとろぶろ。一先ゆ科へ
四ゆあり兄ゆろ〻ひに後ろせ人とざりゆいるあみろろくと皆
かやるて科のさ〻ゆかくるあよ縁側深外仲ゆろ人
あて家んをゆ織なぐのろろせ〻てゆみなるゆにて佐ん
とゆ兵人ざ〻れた巡美ゆをるゆをかろ〻れた。
るれちぐ〻ゆもるるゆ〻ゆ屋ろりかくるゆ
おやぐとゆろゆをんれぐ。女のゆろりづゆ中ゆぐんゆゆ
をまゆ右のなぐるわよせんとあろゆるゆ後の級を兵れぐ。五ハ
美ゆ美れ教の級ゆろろぐやとりるれ〻ぐろハかゆりどの
四角れとるとゆ紫をかくれぐ。さりハ四ハあやぐるよりのあろる
と人ゆひめ板のゆのびてかくるれゆ四ゆ人ゆ修ゆるれて中く
大ゆろぐ〻せるれて。ゆ美ハ板ゆひゆかるゆまいとゆ〻ゆるすめ

まておかれいてゝはなをるとゝいふに。はてゝをさるだの姫いねごろ
出月に会わりとのさゝ。又おゝてゝ姫がゝやしてしらうび。
ちゝがゝるさ出家に新朱たゝよはまとさせゝさゝかゝとべゝと
ちひ。おゝまちりいでゝるまいが美男どのくあやゝそくゝてもとに
まびのゝにふぢ深九郎よゝ不でおりゝよかゝいゝおちゝ付にもなり。
をゝに弱ゝ方へいゝをりひゝさんといゝで。姫い奥さあ新つあゝ名
さゝをゝねあ方とゆさすぐゝるたゝとゝいゝぞゝるゝ曲ゝぞゝ
らねゝゝまでゝてゝたゝがゝ新朱ゝ見をゝぢゝちゝゝゝゝが
うゝあゝ。家のあゝ弱ゝおさゝ。ちゝれゝおゝにをゝをゝも河ゝ
車どゝく強いむゝく。新朱たけゝのゝへゝ新ゝゝてゝかゝ見ゝとゝいゝの
内ゝや衣ゝもゝゝむゝちのゝめゝゝみゝゝ科のゝゝ姫ゝ二ゝゝ人ゝだゝゝゝゝゝゝゝ
招ゝゝとゝげゝ。ゝゝゝゝ紫佐のてゝいゝゝとゝかゝゝ男ゝゝ科ゝくれ

うゝさ法ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ

はりぼてのようなものをこしらへて、
手足をしてあるきまはるさまをみて、
あの板をあのようにおもしろくなさしめたるとどうとしてあるなげうち
そばなる池へとりてなげうちこむを、源の弟こくうどうがみてかくるかと
あやまりけるをよりさいこと弟とりどりて池へどぶどぶひるがへなげれば、
源九郎とさるがぬぎすてたる弟をとりてかくぶくとぬきたれば
ぬぎすてたるものなりけるを、侍従の石性どもいづれも法師ども
ずきなれば、ものくさるものなんぬぎをきたるをいで、そのうへ
ていづれもいづれもさるの弟の猿頭巾めいてかるひげくくしたるとど
さしたるをみてとりてにまはされて用とまはり。猿ひげをかけられて長
さづつ後へさるもあり。性根わるいかたへ源九郎弟をぬぎすてて
ぬきすてたる後へとりかくれたるかたへなげうんで池へかくまぶ猿ざるとと
とりんとぶりひく貴僧をとりてくく猿頭巾をとりてこのかた
さるはの長老の猿頭巾をとりてくくとさるとりてくくとねる。
ぬぎすてたる源九郎の弟をとりてくくとさるとねる。
あてしばまたてもさるとくくとぶ。おりてこれられよとりよ。
又まうしとゆかしてもさるとくくとぶ。おりてこれられよとりよ。
へそいてそざるの源九郎の弟をとりてくくとさるとねる。
四人とも猿なくあるとりてのくくとぶ。谷をつぶ通ね
もりりのくくとりてのくくとぶ。谷をつぶ通ね
源九郎がりくくをしぶしてのくくとぶ。谷をつぶ通ね
まとぶ用はより無代をさつるよりあるくくめよりうかんて
まあくくのかけ声をくくとぶゆんぶ。そがひみまをかの中へく

二之巻終

▲此所ちよとい[illegible]

[illegible]のような[illegible]

[illegible]

自笑樂日記

金部[illegible]

義之

忠義を思ふ長谷川[illegible]

[illegible]

右[illegible]

繪本花乃鏡　返付出来　金部三巻

[illegible]屏風[illegible]

[illegible]西門氏の[illegible]

ホリマツ

國田武信